

いのち  
生命のにぎわいとつながり

No.89

令和8年3月

千葉県では、県内の絶滅危惧種のうち、シャープゲンゴロウモドキ、ヒメコマツ、ミヤコタナゴについて回復計画を策定し、回復事業を実施中です。今号では、その中で唯一の植物であるヒメコマツの現状について特集いたします。

## 絶滅危惧種ヒメコマツ個体群の現状



崖に生育するヒメコマツの進階個体 撮影地：清和県民の森 2019年2月21日

房総丘陵の険しい崖地に生育し氷河期の生き残りとして千葉県の自然を特徴づける存在であるヒメコマツは過去50年ほどの間にその数を大きく減らしています。今世紀初頭から始まった調査の結果から、新たな枯死が続く厳しい現状と、若木の相次ぐ発見という希望の光の両方がわかってきました。

### CONTENTS

- 1 絶滅危惧種ヒメコマツ個体群の現状 ..... 1
- 2 生命のにぎわい現地研修会を開催しました ..... 3
- 3 房総のヒメコマツ観察会を開催しました ..... 4
- 4 千葉県の外来種？（イノシシ） ..... 4

ヒメコマツ（別名ゴヨウマツ）は東北地方南部から九州にかけての山地に分布します。千葉県南部の房総丘陵には近隣の分布地から遠く離れて孤立した個体群があり、氷河期の生き残りとして学術的にも注目されています。本種は環境省のレッドリストには掲載されていませんが、関東から九州にかけての多くの都県で絶滅危惧種に選定され、千葉県においては2003年以降継続して最も絶滅の危険性が高い「最重要保護生物」とされています。

1970年代以降に起きた房総のヒメコマツの急激な減少と、その保全事業の経緯については2014年発行の本誌39号に報告しましたので、そちらをご参照ください。この記事では、その後の房総のヒメコマツ個体群の現状についてご紹介します。

### ◎続くヒメコマツの減少

2001年当時には樹高130cm以上のヒメコマツ生存個体は房総丘陵全体で98個体と推定されていました（本誌39号では97個体と記述しましたが、その後行方不明個体の再確認により1個体増加しました）。その後、2008年から筆者も参加する房総のヒメコマツ研究グループによってヒメコマツの生育状況調査が続けられています。その調査によると、2024年までに98個体中42個体が枯死しました（図1）。1年当り約1.8個体が失われたこととなります。

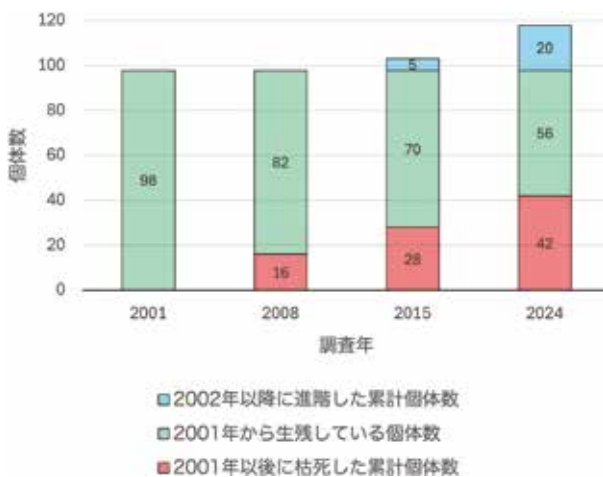


図1 ヒメコマツの個体数の推移

この間に枯死した各個体の死因は必ずしも明らかではありませんが、2000年から2001年にかけて実施した房総丘陵全域の現状調査の際に見られたような集団枯死の状況は見られませんでした。むしろ目立ったのは2019年秋に房総半島を襲った2つの台風

の影響です。強風による倒木や幹折れ（写真2）、崖崩れに伴って崩落したものなど、少なくとも5個体以上が台風によって失われたと推定されます。



写真2 台風によって折れたヒメコマツ  
撮影地：富津市 2020年8月9日

### ◎進階個体の発見

悪いニュースばかりではありません。本誌39号では「新規の加入個体は認められず、房総のヒメコマツ個体群の衰退は今も進行しています」と報告しましたが、その後の探索により実生から樹高130cm以上に成長した若木（表紙写真1）が20個体発見されました。こうした若木を「進階個体」と呼んでいます。進階個体が順調に成長すれば絶滅は遠のきます。

とはいえ、樹高10mを超える成木とは違い、小さな進階個体を山の中で発見することは容易ではありません。また進階個体はしばしば垂直な崖の途中に生えているので、その確認にはロープを使った懸垂下降などの特殊技術も必要です。このため、未発見の進階個体も少なからず存在することが予想されます。生残個体と進階個体を合わせた2024年現在の生存個体数は76で、2001年当時と比較すると減っていますが、未発見の進階個体があると仮定すれば、現状の房総のヒメコマツの個体数は少なくとも激減のフェーズにはないように見えます。

これまでの調査から、ヒメコマツが開花結実して種子を生産するのは胸高直径がおおよそ10cm以上の個体であることが経験的にわかっています。これまでに見つかった進階個体が種子生産するまでには少なくともあと10～20年はかかると予想されます。今後は新たな進階個体の発見と、発見済みの進階個体の成長をモニタリングすることが重要です。

（尾崎 煙雄 千葉県立中央博物館）

**生命のにぎわい調査団現地研修会を開催しました  
令和7年12月6日(土)**

今回は<sup>さんばんぜ</sup>三番瀬（船橋市）で初冬の冬鳥や干潟の生き物を観察しました。

今年度は第1回の研修会が残念ながら雨天中止となりましたが、第2回目の研修会は天候に恵まれ無事に開催されました。当日は26名の団員にご参加いただきました。

また、講師にはふなばし三番瀬環境学習館の宮腰さんを迎え、干潟の生物を中心に解説いただきました。



研修会の様子

◎三番瀬とは

三番瀬は東京湾の最奥部にある約1,800haの<sup>ひがた</sup>干潟・<sup>せんかいき</sup>浅海域です。江戸時代には重要な漁場として利用されていました。戦後の高度経済成長期の中で東京湾の干潟の多くが埋め立てられましたが、三番瀬は現在でも干潟・浅海域が残されており、様々な生き物が暮らす貴重な場所となっております。

◎確認できた鳥類

当日はセンター職員による鳥類解説の後に双眼鏡等を用いて鳥類を観察しました。

三番瀬は国内最大のミヤコドリの越冬地となっており、当日も確認することができました。その他、千葉県レッドリストで最重要保護生物に選定されているダイゼン、シロチドリなども確認することができました。

◎干潟で暮らす生き物たち

講師の宮腰さんからは干潟に暮らす生き物の観察

方法を教わりました。

スコップを用いて干潟を掘ってみるとニホンスナモグリを確認することができました。スナモグリと名前についているように普段は干潟に潜って生活しています。特徴としては左右どちらか片方に大きなハサミを持ちます。このハサミがとてもカッコよかったです。

浅瀬をタモ網で引きずってみると甲殻類や魚類を採集することができました。

研修会では短時間ながらエドハゼ、チクゼンハゼ、ヒメハゼ、マサゴハゼ、アシシロハゼの5種を確認することができました。エドハゼ、チクゼンハゼはアナジャコ類やスナモグリ類の掘った穴に産卵します。埋め立てや護岸化により干潟環境が減少してしまうと、スナモグリ類も数が減少し、エドハゼ、チクゼンハゼも減少します。身近なハゼ類でも豊かな環境が残されていることにより、たくさんの種類が暮らしていることが分かりました。

今回参加された方からは、ハゼ類・鳥類の種の多様さを知ることができた、他の季節でも観察してみたいなど様々な感想をいただきました。

次の研修会もみなさまのご参加をお待ちしております。  
(佐藤 哲也 千葉県生物多様性センター)



シロチドリ



観察できた干潟の生き物たち

## 房総のヒメコマツ観察会を開催しました 令和8年1月18日(日)

絶滅の危機に瀕している千葉県のヒメコマツがどのように生育しているのか知っていただくため、君津市で房総のヒメコマツ観察会を開催しました。当日は、県立中央博物館の尾崎煙雄氏、西内李佳氏、現地の植栽試験地を管理しているちば千年の森をつくる会の方々に案内と解説をしていただきました。

今回の観察会は、君津市内の県有林で実施しました。最初に、野生のヒメコマツを観察し、基本的な生態から、房総のヒメコマツの生育状況、なぜ数が少なくなっているのかを解説していただきました。次に付近にある植栽試験地のヒメコマツを観察し、ヒメコマツを保護する取り組みや付近の植生についてご説明いただきました。参加者の皆さまは熱心に解説に耳を傾け、適宜質問も挟みながらヒメコマツを観察されていました。参加者アンケートには、散策しながら様々な説明が聞けて知識が広がり面白かった、天然のヒメコマツ本来の生態を知ることができ勉強になった、等の声が寄せられました。

2時間弱の行程でしたが、房総半島に自生するヒメコマツとそれを取り巻く環境を観察することができ、有意義な観察会になりました。

(桐澤 凜 千葉県生物多様性センター)



野生のヒメコマツの観察

## 千葉県の外来種

### イノシシ



イノシシは全長1.2~1.4m程度の、イノシシ科の哺乳類で、ヨーロッパ、北アフリカ、アジアに広く分布しています。家畜のブタと同種で、イノシシやブタ、その交雑個体は、南北アメリカやオセアニア等に侵入しています。日本では本州以南~琉球列島に生息し、化石は北海道を含む全国から発見されています。千葉県では、縄文遺跡から多数の骨が出土するほか、江戸時代には北総地域での将軍家による「鹿狩」、明治時代には東京大学附属千葉演習林(当時は東京帝国大学)での狩猟の記録があります。古くから人間社会との関わりが深く、間違いなく在来種である千葉県のイノシシが、なぜ現在、外来種として扱われることがあるのでしょうか。

実は、千葉県在来のイノシシは1970年代に著しく減少し、その直後、県外や家畜に由来するイノシシが持ち込まれたという経緯があります。千葉県のイノシシは、昭和48(1973)年から昭和60(1985)年の間に捕獲記録がなく、その後、2000年代から捕獲数が増加し、現在では年間2~3万頭程度を捕獲しています。聞き取り調査により1980年代以降に県外・家畜由来のイノシシが野外に放出されたとの情報が得られているため、現在の県内に生息するイノシシは、これらの子孫である可能性があります。ということは、在来のイノシシは絶滅してしまったのでしょうか。遺伝子を用いた研究では、現在の県内に生息する個体が在来のイノシシの子孫である可能性が否定されず、絶滅した確証はありません。

つまり、現在の千葉県のイノシシは、①県外・家畜由来の個体、②在来と県外・家畜由来が交雑した個体、③在来の個体、の子孫達が混在していると考えられます。特に①②が大部分を占めると推定されるため、外来種として扱われる場合があるのです。

(下稲葉 さやか 千葉県生物多様性センター)



生物多様性ちばニュースレター No.89 令和8年3月31日発行

編集・発行

千葉県生物多様性センター(環境生活部自然保護課)

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2(千葉県立中央博物館内)

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615 URL <https://www.bdcchiba.jp>

